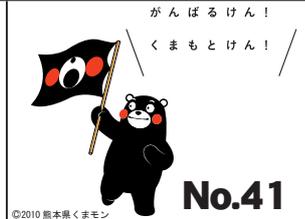


編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301
2018年11月1日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成30年11月～1月)

1 博物館ネットワークセンター第4回企画展「ちょっと昔のくらし探検区」

様々な道具の機械化や家電製品の普及・発達によって、私たちの生活は大きく様変わりしてきました。

「台所今昔」では、水道、家電製品、ガス製品が普及する以前の台所用具を「台所今昔」として展示しています。

また、かつては各家庭に必ず数種類はあり、身近な道具であった桶・樽・盥も展示しています。

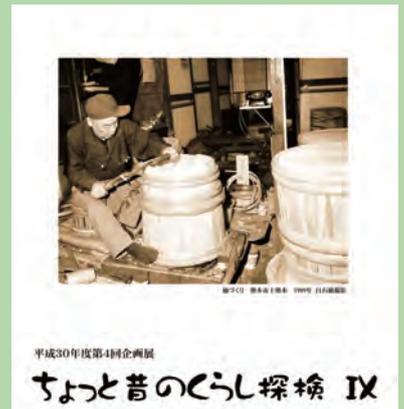
○開催期間

平成30年10月2日(火)～平成30年12月16日(日)

※月曜(祝日の場合は翌日)は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室



2 博物館ネットワークセンター第5回企画展「くまもとの水辺の植物」

水が豊富な熊本県に生育する水辺の植物の姿や生き方を紹介します。

○開催期間

平成31年1月4日(金)～平成31年3月17日(日)

※月曜(祝日の場合は翌日)は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室



ヒシ(浮葉植物の一種)

3 「フィールドミュージアムに飛びだそう！」へのお誘い

1 落ち葉図鑑を作ろう②

日時:平成30年11月25日(日) 10:00～12:00

申込期間:平成30年10月29日～平成30年11月11日

場所:大滝自然森林公園(球磨郡五木村乙字上小鶴)

落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。

2 水辺の冬鳥を観察しよう

日時:平成31年1月20日(日) 10:00～12:00

申込期間:平成30年12月17日～平成31年1月4日

場所:熊本市上江津湖

クロツラヘラサギなど、江津湖にやってくる鳥を観察します。



水辺の冬鳥を観察しよう(昨年度)

センターからのお知らせ

ミュージアムパートナーズクラブに参加してみませんか？



さまざまなMPCが日々活動しています
(左:地域史調査、右:シダを楽しむ会)

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ミュージアムパートナーズクラブ(MPC)」という団体が活動しています。さまざまな博物館活動に主体的に参加することで、熊本の自然や文化について楽しく学んでいけるクラブです。現在、大地の成り立ちや動植物、地域の歴史や文化に関する8つのクラブが活動しています。

熊本地震を契機に地域の自然や文化に対する関心が高まっています。みなさんも気の合う仲間と一緒に博物館活動に参加してみませんか？詳しくは、熊本県博物館ネットワークセンターへお問い合わせ下さい。

No. 214
動物

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (ドジョウ科)

ドジョウ(写真1・2)は全国の水田や池、小川などに生息する、細長くぬるぬるした体の魚で、童謡にも登場するなど、昔から身近な魚として人々に親しまれてきました。10本の口ひげが生えた顔はとても愛嬌がありますが、この口ひげは感覚器官で、餌となる虫などを泥の中から探し出すのに役立てられています。

日本人なら誰もが知っているくらいに身近だったはずのドジョウですが、実は今、全国的に減少していて、環境省のレッドリストでは2013年版で「情報不足」として加えられ、最新の2018年版では「準絶滅危惧」とされました。減少の原因として水田の乾田化、水路や小川の三面コンクリート化などが指摘されているものの、その実態は減少の程度も含め、まだ十分に把握されているとは言えないようです。

熊本県では今のところ県版レッドリストへの掲載はされていませんが、やはり減少しているのか、県内でドジョウに会うのは容易ではなくなっています。人知れず減りゆくこの愛嬌者の姿が、いつまでも熊本の水辺で見られるよう、大切に守っていきたいですね。(中菌洋行)



写真1 ドジョウ樹脂封入標本



写真2 生態写真

No. 215
歴史

きりしたんしゅうもんのもののおあずかりちょう
切支丹宗門之者御預帳 (八代市竹田家資料)

万治3年(1660)から天和2年(1682)までの22年間に豊後国(大分県)で多くの潜伏キリシタンが露見する事件が起こりました。この事件は、「豊後崩れ」と呼ばれ、豊後国の諸藩(府内藩・臼杵藩など)と鶴崎領がある肥後藩が長崎奉行(幕府・長崎奉行所)と連携し、22年間で豊後国内において517名の潜伏キリシタンを召し捕らえています。

この資料の表紙には、「切支丹宗門之者御預帳」と書かれ、その本文には、鶴崎領内で露見したキリシタン宗門の者79名の名前と在所村名、年齢や生所及び没年などが記載されています(写真1)。また、肥後藩預かりのキリシタン宗門の者79名の内、病死した者などについて、そして残りの64名の内、54名(男25名、女29名)を城下に集め、監禁したことが記されています(写真2)。

末尾を見ると、寛文8年(1668)申9月13日付けで肥後藩の4家老連署により、長崎奉行の松平甚三郎隆見宛てに出されたものであることがわかります。

この豊後崩れでは、肥後藩は517名の内、91名の潜伏キリシタンを召し捕っています。この資料からは、その中の79名の情報が読み取れ、豊後崩れにおける肥後藩の対応の一片を伺い知ることが出来ます。(堤 将太)



写真1 御預帳本文



写真2 御預帳本文

No. 216
植 物

コウガイセキシヨウモ *Vallisneria* × *pseudorosulata* (トチカガミ科)

トチカガミ科のセキシヨウモ属植物は、淡水性の沈水植物です。水底に根を張り、リボン状の細長い葉を水に漂わせて伸ばしていきます。

コウガイセキシヨウモは、熊本県を含む日本各地での繁殖が近年になって報告された、外来かつ雑種のセキシヨウモ属植物です(藤井ほか 2016)。雑種と言っても熊本県に分布するセキシヨウモやヒラモとは関係なく、ヨーロッパ原産のセイヨウセキシヨウモと日本を含むアジアに分布するコウガイモの雑種です。アクアリウム等で使われる栽培のものが逸出したのではないかと考えられています。その形態的特徴は、根元のロゼット茎と呼ばれる茎が伸長する傾向があることと、葉の先が丸いことです。繁殖力が旺盛で、環境省・農林水産省が定める「生態系被害防止外来種リスト」では重点対策外来種に選定されています。

写真の標本は熊本県内で採集されたコウガイセキシヨウモです。当センターの標本を調査した水草の研究者により、セキシヨウモとして扱われていた標本がコウガイセキシヨウモである事が分かり、熊本県での分布が証拠付けられました(藤井ほか 2016)。博物館に収蔵された資料を専門の研究者が調査することにより、それまで隠れていた自然の姿が浮かび上がってきます。(前田哲弥)

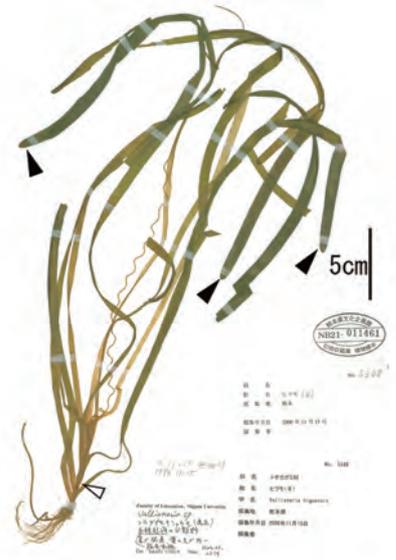


写真 コウガイセキシヨウモの標本
伸長する茎(△)と丸い葉先(▲)

No. 217
地 学

たくまさんざん
託麻三山

熊本市東部の託麻台地には、^{おやまやま}小山山(190m)、^{こうぞのやま}神園山(183m)、^{としまやま}戸島山(133m)の3つの山が島状に分布しています(写真1)。これらは合わせて託麻三山と呼ばれ、登山コースとして親しまれています。これらの山はどのようにしてできたのでしょうか。

託麻三山の岩石を見てみましょう。^{おやまやま}小山山で採取した岩石(写真2)は、粒が粗く硬い砂岩で、中には二枚貝の化石が入っています。その他、礫岩や泥岩といった水の中で土砂が堆積してできる岩石(堆積岩)が見られます。このことから、託麻三山は堆積岩でできた山だとわかります。

また、^{おやまやま}小山山や^{こうぞのやま}神園山などではイノセラムスという二枚貝やアンモナイト類といった時代を示す化石(示準化石^{しじゅんかせき})を産出し、中生代白亜紀後期の堆積岩からできていることがわかりました。そして、^{ひめのうらそうぐん}天草や宇土半島に分布する姫浦層群と同時期にできた地層と考えられています。

託麻三山周辺は、阿蘇火山の巨大噴火が起こる直前は堆積岩でできた山地が広がっていましたが、巨大噴火による火砕流堆積物や河川堆積物によって低い部分が埋められました。託麻三山は埋められずに残った山頂部です。(廣田志乃)

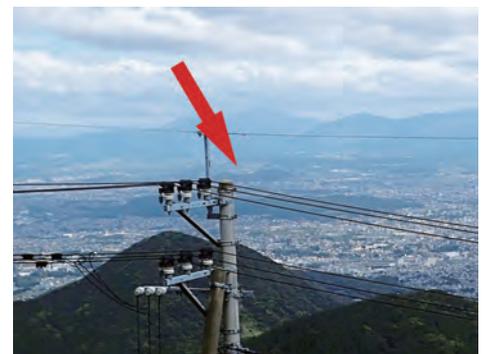


写真1 託麻三山



写真2 小山山で採取した岩石

No. 218
民俗

おけやどうぐ
桶屋道具

桶は、樽くればと呼ばれる湾曲した細長い板を円筒形に並べてたが箍で締め、底板を取り付けた容器です。家で使う日用品から農作業で使うもの、漁で使うもの、酒屋など商売で使うものなど、大小様々な形のものがあり、暮らしになくてはならないものでした。

熊本県では、舟運の中心地で木材の集散地であった熊本市の川尻で作られる桶が有名ですが、桶は生活に密着した道具でしたので、県内各地に桶屋がいて、注文に応じて桶を作ったり修理をしたりしていました。

写真は熊本市北区植木町の桶屋が使っていた道具一式です。12種類、70余りの道具が一つの道具箱に収められていました。

斧や鉋おのは、丸太を割り、板を取り出す道具です。湾曲した板になるよう刃が湾曲した鉋なたもあります。鋸のこぎりで大きさを揃えて切り出した板の外側の丸みと接合面の角度を桶型で計り、腹当はらあてに板を当て、刃が湾曲したせん鐵せんや丸い台の鉋かんで削って滑らかな曲線を描く樽せんを作ります。様々な大きさや形の桶に合わせてたくさんの型があります。樽の接合面は、平でピッタリ合うように正直鉋という大型の鉋で削りました。こうしてできた樽を円筒形に並べ、底板抜きで接合面に穴を空けて竹釘で繋ぎ、箍きつちを木槌や輪締めへらを使ってしっかりと締めます。底板はきり錐きりをコンパスのように使って丸く切り取り、野引けびきで位置を決めて槍鉋やりがんなで溝を掘ってはめ込みます。三又錐のみや鑿ひもは紐や持ち手を入れる穴を開けます。

こうして様々な道具を駆使して、美しく丈夫で水漏れしない桶が出来上がるのですが、板面のわずかなデコボコの修正や樽の角度の微調整などに使われたやすり鑿やすりや刃先の変わった小刀などに、職人のこだわりが感じられます。
(迫田久美子)



写真 桶屋道具

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分

J R 松橋駅より約3km



編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301
2019年3月5日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成31年1月～4月)

1 第5回企画展「くまもとの水辺の植物」 開催中です

水が豊富な熊本県に生育する水辺の植物にスポットを当て、水辺の環境に適応した姿や生き方を紹介しています。

○開催期間

2019年3月17日(日)まで

※月曜は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室



ガマ(抽水植物の一種)

2 第6回企画展「金峰山の地質」 開催のお知らせ

熊本市の西にそびえる^{きんぼうざん}金峰山。金峰山が火山であることはあまり知られていません。現在の金峰山がどのような過程を経て形成されたか、金峰山とその周辺の地質を紹介しながら、太古に思いをめぐらしましょう。

○開催期間

2019年3月26日(火)～5月26日(日)

※月曜(祝日の場合は翌日)は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室

○関連企画

展示解説を4月28日(日)午前10時30分から行います。



金峰山(一ノ岳)



一ノ岳をつくる安山岩(火山岩)

センターからのお知らせ

「フィールドミュージアムへ飛び出そう！」へのご参加ありがとうございました。

今年度は「地層と化石を観察しよう」をはじめ、9回のフィールドミュージアムを開催しました。合計で延べ244名の方が参加していただき、熊本の自然の素晴らしさや不思議さに触れることができたのではないのでしょうか。来年度も同様に、県民の皆さんに熊本の自然の素晴らしさや不思議さをお届けできるプログラムを計画してまいります。多くの皆さんの申し込みをお待ちしています。



今年度の活動の様子です
(左：落ち葉図鑑を作ろう、右：地層と化石を観察しよう)

ミュージアムパートナーになりませんか？

現在、ミュージアムパートナーズクラブ(MPC)として8つのグループが活動しています。県内の各地に出かけ、観察や採集を行うグループもあれば、当センターを中心に地域の歴史などについて学びながら交流を深めるグループもあります。会員の中には専門的に詳しく説明・解説をしていただける方もおられるので、「知らないから」、「難しいから」という考えは一旦置いて、気になる活動に参加してみませんか。

詳しくは、博物館ネットワークセンター(電話0964-34-3301)へお問い合わせ下さい。



多くの方がさまざまなMPCで活動しています
(左：草木染めの会、右：貝類調べ隊)

No. 219
民俗

みずだる
水樽

樽は、酒、醤油、味噌、漬け物など、液体や水気の多いものの運搬・貯蔵に用いる木製容器です。当初は木をくりぬいた入れ物であったようですが、やがて、細長い板を円筒形に並べて『たが』で締め、蓋と底板を取り付けたものが一般的となりました。同じ製法で作られる桶と見た目は似ていますが、樽には鏡と呼ばれる本体と一体となった蓋が付く、板目^(注1)で割った板を使う、などの特徴があります。

樽は用途に応じて様々な形のものが作られ使われていました。写真の樽はミズダル（水樽）と呼ばれ、農作業や山仕事などに持ち運ぶ水入れとして使われていたものです。冬場には湯を入れていくのでユダル（湯樽）と呼ぶところもあります。これには約四升の水が入ります。蓋は外れませんが注ぎ口があり木の栓がついています。また、角状に伸びた左右の側板に横木の取手をつけて持ち運びしやすいようにしています。水気を吸った木が膨張して壊れないよう、また野外での使用に耐えられるよう、太めのたがをいくつも締めて頑丈に作られています。このような軽量で持ち運びしやすく大量の水を運べる容器は、野外での長時間の作業には欠かせないものでした。（迫田久美子）



ミズダル 球磨郡あさぎり町 昭和初期
23 × 23 × 36cm

(注1) 丸太を年輪に沿って湾曲した鉋で割ったもの。木目は山形や不規則な波形となる。丈夫で水分が浸透しにくい。

No. 220
動物

キシマミドリシジミ *Thermozephyrus ataxus* (シジミチョウ科)

キシマミドリシジミは、翅を広げた長さが4cm弱の大型のシジミチョウです。国内では神奈川県以西の本州・四国・九州にやや局地的に分布していますが、九州では比較的産地が多く、「キシマ」の名も国内で最初の発見地である霧島山に由来します。

本種を含むミドリシジミ亜族のチョウは「ゼフィルス」と称され、その美しさから愛好家の多いグループです。中でも本種は写真1のように♂と♀とで色彩が全く異なる上、それぞれが抜群の美しさを持っています。

本種は、幼虫が主にアカガシ（ブナ科）の若葉を食べて育つため、成虫もアカガシ林で見られます。ただし、産地・個体数とも決して多くはなく、成虫が見られるのは7月頃の短い期間で、さらにアカガシ林の高いところを高速で飛び回るため、闇雲に成虫を探しても見られる可能性はほとんどないと言えるでしょう。

本種は卵の確認が比較的簡単で、アカガシの低い位置にある芽の基部に産み付けられています（写真2）。秋～冬の間には卵を確認しておけば、同じ場所で成虫を見られる可能性が格段に上がりますし、新産地も開拓できるかもしれません。（中菌洋行）

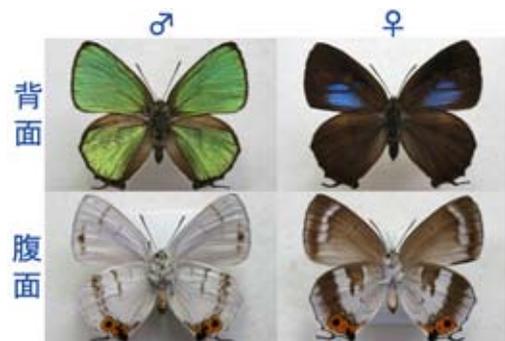


写真1 キシマミドリシジミ成虫（山都町産）

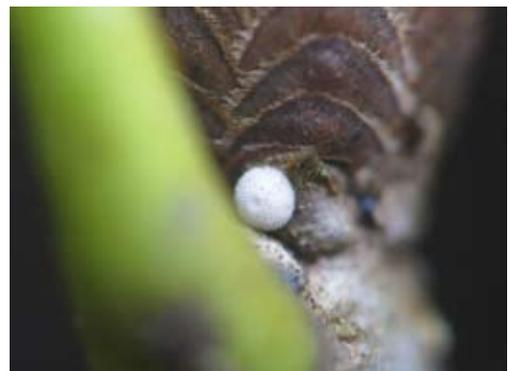


写真2 アカガシに産み付けられた卵（南小国町）

No. 221
歴史

わんからしん
穹窠羅針 (宇城市小田家資料)

この資料は、他にも小方位盤や小方儀とも呼ばれ、また使用する際に杖を差し込んだことから杖先羅針とも呼ばれます。江戸時代末期に地方へ普及し、明治初期まで土地の測量で方位を測定するのに用いられていました。

外見上の特徴は、支柱を傾けても羅針盤が自動的に水平となるように円状の金属軸と半円状の金属軸の2軸を取り付けてあることです(写真1)。

資料自体は、真鍮しんちゆうで作製され、盤内の中央にある羅針を支える軸受けは、測定精度を高めるために、水晶が使用され(写真2)、周囲には「東西南北」及び目盛が刻まれています。

裏面を見ると、端に「江戸(江戸)住 規行」(写真3)と刻字されており、この「規行」という人物は、大野弥三郎規行おおの やさぶろうのりゆきの事です。

大野家は代々江戸幕府暦局御用時計師で、規行は、父である大野弥五郎おおの りさだ規貞とともに優れた時計師であると同時に測量器械師でもあり、伊能忠敬ただたかの測量器機を作製したことからその技術の高さを窺い知ることができます。

この資料が小田家に伝来してきた由来は分かっていませんが、代々、村の庄屋や手永会所の役人を務めた家柄ですので、村や手永会所で使用していたものかもしれません。(堤将太)



写真1 穹窠羅針

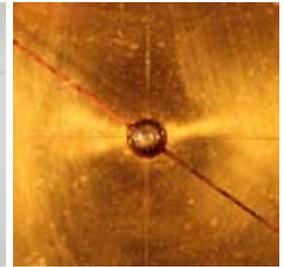


写真2 軸受け部分



写真3 作製者名

No. 222
植物

オニバス *Euryale ferox* (スイレン科)

池や河川などに生育し、やや富栄養化した環境を好む水草で、時には直径1m以上にもなる円形の葉を水面に浮かべる大型の浮葉植物です。葉柄や花柄、葉など植物体全体に鋭いトゲが多数あることがオニバスの名の由来です。とても大きくなる植物ですが、春に種子が発芽するとまたたく間に成長し、夏から秋に開花結実すると枯れてしまう一年生の草本です。また、発芽してすぐの葉は細く沈水性ですが、成長するにつれやじり形、ほこ形、円形と変わるとともに浮葉性となります。このように葉の形が変わる性質を異形性といいます。

花は紫色の花弁を持ち、時に葉を裏から突き破って水面に出て咲きます。この水面上に咲く花(開放花)とは別に、水中で自家受粉をする閉鎖花があり、閉鎖花の方が結実も良いそうです。

オニバスが好むような水辺環境は、開発などによる変化が多いため、オニバスはだんだんと減少しています。そのため、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧II類(VU)、熊本県の保護上重要な野生動植物リスト-レッドリスト2014では絶滅危惧IA類(CR)に選定されています。(前田哲彦)



写真1 オニバスの生育状況(昭和33年:熊本市)



写真2 オニバス(成葉)の押し葉標本

No. 223
地学

よしのそう
芳野層

熊本平野の西にそびえる金峰山（一ノ岳）は、金峰カルデラと呼ばれる一辺約3kmの菱形の凹地にできた火山（中央火口丘）です。そして、今からおよそ40～50万年前、金峰山がまだできていなかった頃、この金峰カルデラには湖がありました。どうして湖があったとわかるのでしょうか？

金峰カルデラ内の熊本市西区河内町岳から松尾町平山北部にかけて、主に泥や砂でできた地層が所々で見られます。この地層は芳野層と呼ばれており、湖で堆積してできたものです。このことから、この一帯は湖であったことがわかります。



写真1 芳野層（右：西区松尾町平山、左：西区河内町岳）

写真1を見てみると、泥の細かい縞状の層（葉理）が発達してパームクーヘンのよう

な模様になっており、間に砂岩や凝灰岩（火山灰でできた岩石）を挟んでいます。この縞模様をよく見ると、白っぽい部分と濃い色の部分との組み合わせでできているのがわかります。この模様が残っているのは、周りから流れ込む川が無く、湖底では酸素が少なく生物がいなかったため、流れや生物によって湖底がかき乱されなかったからだと考えられます。

芳野層は、保存状態の良い化石を多く産出しており（写真2、3）、植物化石や花粉化石の種類から、芳野層堆積時の植生や気候がわかっています。当時はブナ主体の落葉広葉樹と針葉樹の混交林よりなり、現在よりも冷涼な気候でした。気候を詳しく見てみると、寒冷化から温暖化、再び寒冷化と変化しています。

芳野層が堆積した湖は、最初は火山活動の影響を受けていましたが、火山活動が収まると水量が安定した湖となりました。しかし、金峰カルデラ内に溶岩を噴出した火山活動が起こると、やがて消滅しました。（廣田志乃）



写真2 ブナの葉

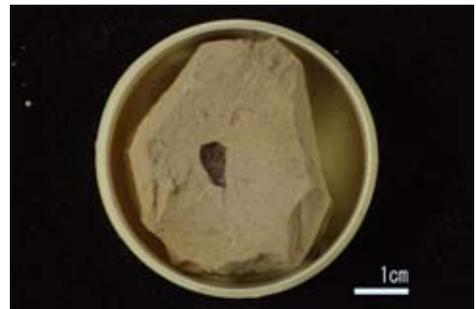


写真3 ハリモミの種子

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分

J R 松橋駅より約3km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2019年7月12日



No. 43

イベント情報（令和元年8月～11月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第2回

国立科学博物館コラボミュージアム

「生命のれきしー君につながるものがたりー」

国立科学博物館との共同開催により、化石や岩石を通して、地球の歴史、生命の歴史を紹介します。

○開催期間

令和元年8月3日（土）～9月29日（日）



イノセラムス



ニッポノサウルス

第3回

「ちょっと昔の暮らし探検X」

小学校3年生の社会科で習う道具を中心に、昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。

○開催期間

令和元年10月8日（火）～12月15日（日）



「ちょっと昔の暮らし探検X」（昨年度）

フィールドミュージアムに飛びだそう！

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
水辺の植物を観察しよう	嘉島町 浮島神社周辺	8/17（土） 10:00～12:00	20名	川や池の水辺に生育する様々な植物を観察します。	7/22～ 8/2
天体観測② 「月の観察」	熊本市南区城南町 県民天文台	9/13（金） 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で月の観察や写真撮影をします。	8/9～ 8/23
地層と化石を観察しよう	上天草市松島町 千巖山	10/26（土） 13:30～15:30	20名	地層と化石を専門家の解説とともに見学します。	9/27～ 10/11
落ち葉図鑑を作ろう	和水町 肥後民家村	11/16（土） 10:00～12:00	20名	落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。	10/21～ 11/1

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。

（往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。）

No. 224
地学

きせき
バラ輝石 Rhodonite

バラ輝石は、バラの花のような赤色やピンク色をしていることから名付けられた鉱物です。英語名の“Rhodonite”も、ギリシア語のバラ“rhodon”に由来しています。結晶の形が見られることは少なく、多くは粒状の鉱物の集合体として産出します。また、長い間空気にさらされると、酸化して黒くなるという特徴があります。



写真1 バラ輝石

バラ輝石は、マンガンを含む鉱物で、マンガン鉱床中によく見られます。マンガン成分の割合は低いのですが、太平洋戦争中から戦後にかけて、「バラキ」というマンガン鉱石として採掘されました。

写真1の標本は、玉東町にある木葉山の東方で採取したバラ輝石です。全体的に濃いピンク色をしています。標本をよく見てみると、粒状の鉱物の集合体できており、ところどころに透明でやや大きな鉱物が見られます。

木葉山周辺から鹿央町南部にかけてマンガン鉱床が分布しており、かつて木葉山の東方では盛んにマンガン鉱石の採掘が行われていました。この標本を採取した鉱山では、主にバラ輝石が採掘されていました。現在、鉱山は閉山しており、この付近でバラ輝石を採取するのは困難です。(廣田志乃)

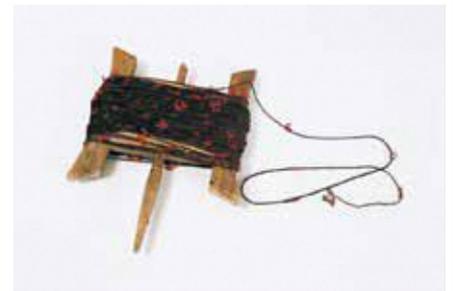
No. 225
民俗

田植縄

田植縄は、苗を縦横真っ直ぐ一定の間隔に揃えて植える“正条植え”を行うための道具です。県内ではタウエヅナと呼ばれることが多いようです。水に強いシュロや麻の細縄に、目印とする赤い紐が付いています。化繊の縄にプラスチックの玉を付けたものや針金のものもありました。

昔の田植えは乱れ植えとってだいたいの間隔で植えていましたが、明治の中頃より正条植えが広まると、直角を測る定規や、植える位置に型を付ける枠など、正条植えを行うための様々な道具が考案されました。田植縄もそのひとつですが、田植えをユイやモヤイと呼ばれる共同作業で行うところでは、縄を用いるやり方が最も能率的だったようです。

使い方は、まず、基準とする縄を田の一辺に張って固定し、これと直角になるように縄を張って、印の位置に苗を植えます。一列植えた後退し、縄を張り直して植えていくことで、等間隔に植えることが出来ます。株間は8寸(約24cm)が一般的とされますが、ネットワークセンターに収蔵する田植縄は、印の間隔が6寸(約18cm)から9寸(約27cm)の間で様々なものがあり、使用者が田の条件に合わせて間隔を決めていたことが分かります。(迫田久美子)



タウエヅナ

熊本市南区城南町 昭和30年代まで
木枠 42×30×4cm
シュロ縄の印間隔 7.5寸(約23cm)



田植縄を用いた田植え

八代郡竜北町不知火干拓
1968年 白石巖撮影

No. 226
動物

キベリマメゲンゴロウ *Platambus fimbriatus* (ゲンゴロウ科)

キベリマメゲンゴロウは体長 7 mm ほどのゲンゴロウで、名前の通り、上翅を縁取るように淡黄色の模様が入る美しい種類です。ゲンゴロウの仲間の多くが池や水田といった止水環境に生息しているのに対し、本種は水のきれいな河川の中～下流域に局地的に生息しています（写真 2）。

本種の生息する環境は水質汚濁や河川改修などの影響を受けやすく、それに伴って本種の生息も危うくなっており、環境省のレッドリスト（2019 年版）で準絶滅危惧、熊本県のレッドリスト（2014 年版）では絶滅危惧 IA 類となっています。熊本県のレッドデータブック（2009 年版）によると、本種は県内では荒尾市、菊池市、熊本市から記録があるようですが、いずれの産地でも近年は生息が確認できなくなっているようです。

写真 1-2 の個体は高森町の河川で確認されたもので、川岸の淀みに比較的まとまった数が見られました。この美しい虫と彼らが生きる美しい川を、いつまでも大切に守っていきたいですね。（中菌洋行）



写真 1
キベリマメゲンゴロウ標本（高森町産）



写真 2 生態写真（高森町）

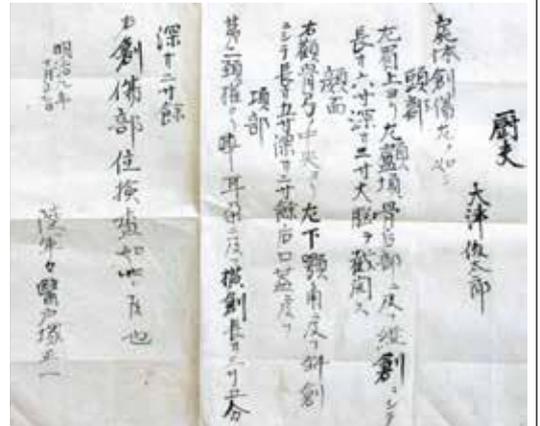
No. 227
歴史

大津俊太郎創傷部位検査書

この資料には、明治 9 年（1876）10 月に熊本で起こった神風連の乱の死亡者である大津俊太郎が受けた創傷部位の検査結果が書き記されています。

大津は、明治 7 年（1874）10 月から熊本鎮台病院^{ちゆうふ}厨夫として勤務した人物で、この厨夫とは、調理場で働く男子のこと、いわゆる料理人のことです。

神風連の乱では、要人と鎮台兵營の襲撃が行われ、その際に、鎮台司令官^{たねだまさあき}種田政明などの要人を殺害し、さらに、兵營に放火するなどしたため、襲撃当初は鎮台を混乱に陥れました。しかし、戦闘中に賊徒の指導的立場の者が戦死したことや襲われた



大津俊太郎創傷部位検査書

鎮台兵が反撃に転じると、多くの賊徒が鎮台内から退却し、自刃したり捕縛されたりして終結しました。

大津が受けた創傷は、頭部に長さ 6 寸（約 18 cm）、深さ 3 寸（約 9 cm）の「**大脳を截開**」するほどの縦創、顔面に長さ 5 寸（約 15 cm）、深さ 2 寸程（約 6 cm）の斜創、項部に長さ 3 寸 5 分（約 10 cm）、深さ 2 寸程（約 6 cm）の横創と書かれ、大津が受けた傷は、刀や槍による傷であることがわかります。

最後に、日付を見ると明治 9 年 10 月 27 日とあり、前日の 26 日に種田政明の創傷部位の検査（注 1）をしていることから、乱の終結頃には、陸軍軍医によって死傷者の状況の把握が行われていたようです。

（堤将太）

（注 1） JACAR（アジア歴史資料センター） Ref. C08052381800（第 7～9 画像目）、明治 9 年「聊官房中西国事件密事日記 10 月」（防衛省防衛研究所）

No. 228
植 物

ナンバンギセル *Aeginetia indica* (ハマウツボ科)

ナンバンギセルは、イネ科やカヤツリグサ科の植物の根に寄生する一年生の寄生植物です。他の植物に寄生して栄養をもらって生活しているためか、緑色ではなく黄色がかった色をしています。寄生した箇所から伸びる短い茎には、小さな葉が何枚かついています。夏になると、細長い花茎を数本伸ばし、その先に一個ずつ花を咲かせます。淡い紫色の花は茎や花茎とは不釣り合いなほど大きく、形は煙草を吸うためのパイプ、すなわち煙管きせるに似ていて、とても目立ちます（写真1）。



写真1 ナンバンギセルの花

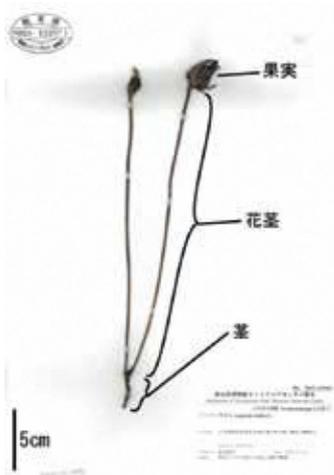


写真2

ナンバンギセルの標本

写真2の標本は、当センターを拠点に活動するミュージアムパートナーズクラブ「雁回山の植物を観る会」の活動の際に採集されたものです。ナンバンギセルの代表的な宿主であるススキ（イネ科）の草むらに会員みんなで探索して見つけた果実期の標本です。丸く熟した果実の表面をやぶると、くすんだ緑色がかかった黄土色の粉が大量にこぼれます。余りに小さいため肉眼では粉にしか見えませんが、これがナンバンギセルの種子です。

近年、身近な道具となったスマートフォンを使うと、このナンバンギセルの種子のようなどとも小さなものもしっかり観察できるようになります。スマートフォンのカメラに、マクロレンズを取り付けることで拡大して撮影でき、画面上の操作でさらに拡大してみることもできます。写真3は、この標本の種子を撮影したもので、種子の大きさは、長さ約0.3mm、幅約0.2mmであることがわかります。さらに種子表面に浮き出ている細かな網目模様も見えてきます。

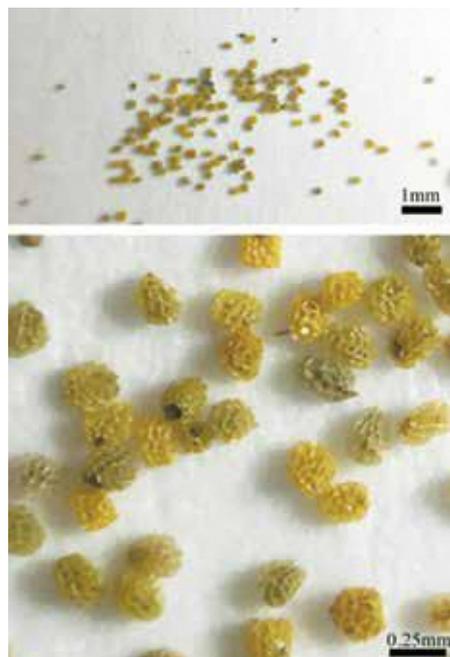


写真3 ナンバンギセルの種子

(上) iPhone6 Plus +マクロレンズで撮影
(下) さらにデジタルズーム（画面上での拡大）で撮影。

なぜこんなに小さいのだろう、網目模様はどんな役割があるのだろう。観察の世界が広がると、新たな不思議が見えてきます。

(前田哲弥)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL : 0964-34-3301 FAX : 0964-34-3302

E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP : <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス：松橋バスターミナルより宮原経由

八代市役所行き「希望の里入口」下車

○JR：松橋駅より約3km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2019年10月29日



No. 44

イベント情報（令和元年11月～令和2年1月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第3回 「ちょっと昔のくらし探検 X」

○開催期間：令和元年10月8日（火）～12月15日（日）

小学校3年生の社会科で習う道具を中心に、昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。昭和30年代後半から40年代までは普通に使われていた、でも最近ではすっかり目にしなくなった道具を展示しています。

棹秤で重さを量ることができる体験コーナーもあります。



第4回 「レンズでのぞこう！植物のせかい」

○開催期間：令和2年1月7日（火）～3月15日（日）

多機能・高機能化したスマートフォンやデジタルカメラは、自然観察の強い味方になります。これらのツールを使って、肉眼では見るができなかった、気づくことができなかった植物の世界をのぞいてみましょう。



フィールドミュージアムにとびだそう！

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
落ち葉図鑑を作ろう	和水町 肥後民家村	2019年 11/16（土） 10:00～12:00	20名	落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。	10/21～ 11/1
水辺の冬鳥を観察しよう	熊本市 江津湖	2020年 1/26（日） 10:00～12:00	20名	クロツラヘラサギなど、江津湖にやってくる鳥を観察します。	12/23～ 1/10

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください（申込期間最終日必着）。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。

（往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。）

No. 229
植物

ナガエコミカンソウ *Phyllanthus tenellus* (ミカンソウ科)

ナガエコミカンソウは、1987年に神奈川県で初めて確認された、比較的最近の外来植物です。インド洋のマスカレーヌ諸島（マスカリン諸島）が原産地と考えられています。九州への移入の確認は1992年の福岡県が最初ようです。熊本県へいつ頃入ってきたのかは定かではありませんが、当センターに収蔵されている熊本県産の標本では、熊本市中央区大江で採集された1994年が最も古い記録（写真1）で、かなり急速に分布を広げたようです。現在では、とても身近な植物となっています。



写真1 1994年に熊本市で採集されたナガエコミカンソウの標本の1つ。

コミカンソウの仲間は、長さ1cmほどの葉の付け根にいくつかの花をつけます（写真2a）。ナガエコミカンソウでは、この花に、その名が示すとおり「長い柄」

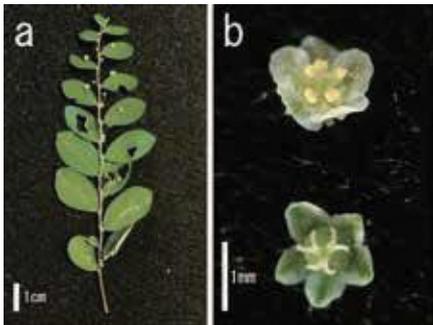


写真2 a: 葉の付け根に花が付く様子。
b: 雄花（上）と雌（下）、iPhone6 Plus +マクロレンズで撮影。

があります。これが在来のコミカンソウとの大きな違いになります。

花は雄花と雌花がある雌雄異花ですが、直径2mm弱程度と小さく、肉眼では雌雄を見分けるくらいしかできない大きさです。マクロレンズを装着したスマートフォンのカメラといった手軽な道具で見ると、雄花の5本の雄しべや、雌花の6つに分かれた雌しべの先の形、雄花と雌花で違う萼の形や色などもはっきり見ることができます（写真2b）。

身近な植物でも、視点を変えると、たくさんの発見があります。
（前田哲弥）

No. 230
地学

宝川内の柱状節理



写真1 柱状節理

水俣市の宝川内城は、かつて薩摩大口方面からの防衛拠点として重要な役割を持つ山城でした。その本丸は山頂部分にあり、山頂の西側はほとんど垂直に近い崖です。宝川内城のあった山は、角閃石安山岩という、マグマが急に冷えて固まった岩石（火山岩）が、元の地層を貫いてできたものです。また、山の形状から、火山の火道（マグマが火口へ流れる通り道）を埋めていたマグマが冷えて固まったものと考えられます。



写真2 柱状節理の断面

北西側の山すその採石場では、太い岩石の柱の集まりが見られます。このような岩石の塊をつくる割れ目を柱状節理といい、溶岩が冷える時に収縮してできたものです。全体を見てみると、中心部では上下方向に柱状節理が発達していますが、岩体の端では外側に曲がっていくのがわかります（写真1）。柱の断面を見てみると、五角形（写真2）や六角形をしているものが多くあります。

ここで採取した角閃石安山岩（写真3）を見てみると、灰色の基質中に細長く黒みを帯びた鉱物（角閃石）を含んでいます。ここで見られる角閃石安山岩の中には、全体がガラス質のものもあります。



写真3 角閃石安山岩

柱状節理の発達した崖は、自然が造り出した造形美を感じることができます。（廣田志乃）

No. 231
民俗

ます
枡

ます
枡は穀粒や粉類、液体などの量をはかる道具です。基準となるのは一升（約1.8L）枡で、その10倍が一斗枡、10分の1が一合枡です。他に二合半枡や五合枡なども使われていました。公で使う五合以上の枡には対角線上に弦鉄を渡すことが定められていました。これを上から見た形を「ます」とよんで、「〇〇有つるがね」などの当て字に今でも使われます。

枡は、律令制の中で全国統一の税制「租」が導入されたことにより、量の基準が定められました。当時の一升枡は今より小さかったといわれます。しかし為政者たちが税収をあげるために様々な大きさの独自の枡を使うようになり、混乱をきたすようになりました。これを再び統一したのは豊臣秀吉で、当時、京都の商人が用いていた京枡を公定枡としました。江戸幕府は、一升枡は4寸9分（約14.8cm）四方、深さ2寸7分（8.2cm）、容積64827立方分（約1.8L）と決めました。この基準が明治以降も使われ続けました。

枡は「益す」「増す」に通じることから縁起物とされ、またお米に関わる大事な道具であることから、神聖な道具として祭りや行事の中で使われます。熊本県でも十五夜のお月見で月に供える里芋などを入れる器とされたり、正月の飾りに用いられたりしています。（迫田久美子）



写真1 一合枡(左) 玉名郡和水町
一升枡(中央) 山鹿市鹿央町
一斗枡(右) 八代市鏡町



写真2 正月の枡飾り 菊池郡大津町
1986年 白石巖撮影

No. 232
動物

マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (タニシ科)

マルタニシ（写真1）は高さ4～5cmほどの殻をもつ淡水産の巻貝で、国内では北海道から沖縄までの水田、池、水路などに生息しています。名前の通り、タニシ科の他種に比べて殻の丸みが強く、縫合と呼ばれる“巻き”の境目が深いのが特徴です（写真2）。

一昔前まではこの水田でも多く見られ、味も良かったためによく食べられていたようです。しかし、農薬や乾田化などの影響で全国的に減少し、「環境省レッドリスト2019」では絶滅危惧Ⅱ類とされています。熊本県のレッドリストには今のところ掲載されていませんが、これは県内に本種の生息に適した水田環境がまだ残されているということを示しているのかもしれませんが。

写真2の個体は上天草市の農業用水路で採集されたものです。当センターの収蔵資料をみると、天草地域のほか、宇土半島、上益城地域で採集されており、県内ではこれらの地域に多い種である事がうかがえます。（中藺洋行）



写真1 マルタニシ生態写真（宇城市）



写真2 マルタニシ標本（上天草市産）

No. 233
歴史

ぜいほういりやく
税法彙略 (宇城市小田家資料)

この資料は、熊本藩の御免方ごめんかた（年貢制度のこと）について、全8巻にわたって書かれたものです。その内容は、延宝8年（1680）、宝暦7年（1757）、安永3年（1774）、天明3年（1783）に出されたそれぞれの御達を引用し、御免方についての考察と享和3年（1803）以来請免うけめん（豊凶に関係しない年貢率の固定化）となったことや文政末年に至ると請免の法が緩み、土免つちめん（豊凶を基準に毎年の収穫高で年貢率を定める方式）に戻すことが唱えられ、村方でも請免の改善を求めたことなどが記されています。

この資料の作者は、坂梨順左衛門惟貞さかなしじゆんざえもんこれさだとされ、この人物は、五町手永ごちようや河江手永ごうえなどで惣庄屋を勤めています。『新訂肥後文献解題』には、その税法彙略の序文に「益城郡河江手永の旧記を本として書いたもの」という記載があることから、おそらく坂梨順左衛門が河江手永の惣庄屋を勤めていた頃に作成されたのではないかと考えられます。

当センターに収蔵されている資料は、税法彙略の第3巻（写真1）で、「請免御達 并 右ニ付而願書之事うけめんおたっしならびにみぎについてねがいがきのこと」という目録表題が付けられています。この巻には、享和3年（1803）亥2月15日付の御国中請免仰せ付けられ候御達（写真2）と御郡代へ相渡し候言付けが書き写され、その他に惣庄屋からの請免についての願書として、享和3年2月付と同年3月2日付（写真3）の惣庄屋衆より御郡代衆宛の願書の写しがあります。

この請免が仰せ付けられた時期の熊本藩は、寛政4年（1792）に島原大變肥後迷惑しまばらたいへん ひ ごめいわくと呼ばれる有明海沿岸を襲った津波や、寛政8年（1796）の水害などにより多くの損害とその復旧のための借財が増えていました。宝暦の改革によって安定していた財政状況も、享和年間には支出超過となっていました。再度安定した財政状況とするために、豊凶に左右される土免よりも、安定した年貢が見込める請免にすることは、熊本藩の年貢制度にとっての大きな転換点の一つであったといえます。（堤将太）



写真1 題字部分



写真2 本文①

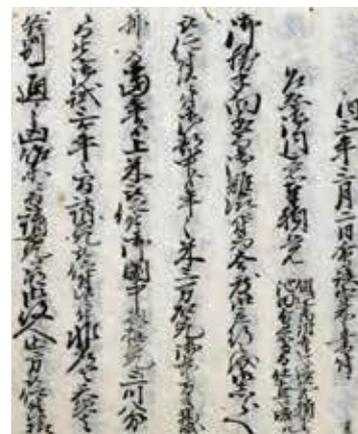


写真3 本文②

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869 - 0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL : 0964 - 34 - 3301 FAX : 0964 - 34 - 3302
E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP : <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>
[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2020年3月10日



No. 45

イベント情報（令和2年3月～6月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第5回企画展「松橋地域に残る古文書の世界」

○開催期間：令和2年3月24日（火）～6月21日（日）

ごのえ てなが
河江手永会所役人を務めた宇城市小田家資料や宇城市教育委員会所蔵の資料を中心に、松橋地域に残る郷土の古文書とその歴史について紹介します。

関連企画

講演会「地域行政アーカイブと日本近世史研究—小田家文書「河江旧記」の画期性—」

講師：熊本大学永青文庫研究センター

准教授 今村直樹 先生

日時：4月26日（日） 13:00～14:30

場所：博物館ネットワークセンター

※事前申込が必要です。4月15日（水）までに、当センターに電話またはメールでお申込みください。



「河江旧記抜書」

宇城市小田家の古文書。江戸時代から明治初期までの、熊本藩から出された行政文書や地域に関する記録をまとめたもの。

学習支援活動

移動展示

当センターに収蔵している資料を、県内各地の社会教育施設等で展示できます。

※費用は不要です。詳しくは当センターにお問い合わせください。

移動体験教室

体験活動をととして、気づき・発見・学びを促す社会教育活動です。学級・学年・PTA活動や子ども会活動などご利用ください。活動内容は、「草木染め」、「葉脈標本でしおりを作ろう」、「貝がらクラフト」、「化石のレプリカを作ろう」、「古銭レプリカを作ろう」などです。

※講師謝金は不要ですが、交通費が必要です。また、内容によっては材料費が必要となる場合があります。活動内容・申込方法等、詳しくは当センターホームページをご覧ください。



講師派遣

学校や社会教育施設等に、当センターの職員が出向いて、授業や講演会などを行うものです。

※講師謝金は不要ですが、交通費が必要です。

No234
歴史

めいじつうほうじっせんしへい
明治通宝十銭紙幣 (西崎俊秋寄贈資料)

明治政府は明治元年（1868）から太政官札^{たじょうかんさつ}と呼ばれる紙幣を発行していました。しかし、偽造が横行し信用が低かったことから、政府は偽造のしにくい精巧な紙幣を発行することとし、明治4年（1871）12月に新紙幣の発行を布告しました。これが明治通宝と呼ばれる紙幣で、百円から十銭までの9種類があり、明治5年（1872）4月から発行が始まりました。

写真の紙幣は明治通宝十銭紙幣で、大きさは縦8.7cm、横5.3cmです。表面のデザインは、鳳凰、竜が配されており、それらを囲んで菊、桐、桜が描かれ、「大日本政府大蔵省」の文字が印刷されています。裏面のデザインは、青海波^{せいがいば}、千鳥、とんぼ、帆立貝、菊、それから中段に孔雀が描かれています。また、表面には「明治通宝」の印と「出納頭」^{すいとうのかみ}の割印、裏面には「大日本帝国政府大蔵卿」^{おおくらきょう}の印と「記録頭」^{きらくのかみ}の割印、さらにひらがなと漢数字を組み合わせた通し番号が押されています。

明治通宝は精巧な技術や政府の努力もあって広く普及しましたが、傷みやすく、後には偽造紙幣も造られるようになりました。そのため明治政府は、明治20年（1887）に十銭紙幣の通用を禁止し、明治26年（1893）までに銀貨との交換を行い、回収しました。他の8種についても明治32年（1889）限りで通用が廃止されることとなりました。（古澤広大）



写真1 十銭紙幣（表面）



写真2 十銭紙幣（裏面）

No235
植物

コバノガマズミ *Viburnum erosum* (レンプクソウ科)



写真1 開花期のコバノガマズミ

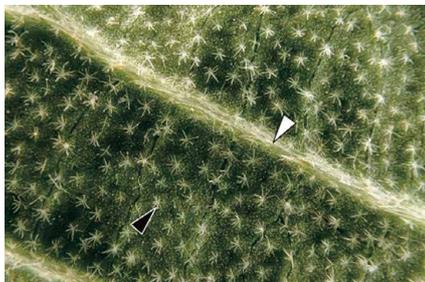


写真2 コバノガマズミの葉の裏。
白矢頭：葉脈上の長毛。黒矢頭：星状毛。枝分かれの数には少し変化がある。

コバノガマズミは、大きくても高さ4m程度の落葉樹です。山地に普通に見られ、樹冠が開けた遊歩道沿いなどの日の当たる環境を好む、非常に身近な樹木です。開花期は春4月頃で、小さな花が多数集まった散房花序^{さんぼうかじょ}はとても目立ちます。一つの花は直径5mm程度で、純白で五つに分かれた花冠が印象的です。よく見ると、雄しべが花冠より長く突き出しています（写真1）。果期は秋で、真っ赤な果実がみのります。

コバノガマズミは、見た目ではよくわかりませんが、触ってみると毛が多いことに気づきます。若い枝、葉の裏表、花序の枝、花のがくなど、いたる所に毛が生えています。しかも、いろいろな種類の毛が生えています。たとえば葉を見てみると、葉脈には長い毛が、葉の面全体には、毛の先が複数に枝分かれした星状毛が夜空の星のように散らばっています（写真2）。他に、花の柄やがくには柔らかい毛、花冠の縁には極めて短い毛があります。ルーペやマクロレンズなどのちょっとした器具があると、手軽に観察することができます。

写真3の標本は、当センターの活動において2011年に熊本市で採集されたものです。コバノガマズミのような身近な植物を、他の植物と共にきちんと標本を作り、蓄積していくことで、地域の自然を記録する価値あるコレクションが構築されていきます。（前田哲弥）



写真3 開花期のコバノガマズミの標本

No236
地学

つえたてそう
杖立層

阿蘇郡小国町杖立温泉南方の杖立川周辺には、砂や泥、珪藻土^{けいそうど}などが薄く重なり合った地層があります（写真1）。このような構造の地層は、波や水流の影響が少ない湖の中心付近で堆積してできます。この地層は、この付近に湖があったことを示しており、杖立層と名付けられました。



写真1 杖立層の露頭

杖立層はおよそ50mの厚さの地層で、砂や泥、珪藻土だけでなく、火砕岩^{かさいがん}や軽石流堆積物^{かるいしりゅうたいせきぶつ}などの火山噴火による噴出物でできた層もあります。軽石流堆積物は約77万年前の火山噴火によるものだとわかっているため、杖立層もその頃にできた地層であると考えられています。

また、杖立層の泥岩からは、植物化石が産出します（写真2）。なかでも、写真2-1のブナの葉や写真2-2のナラ類の葉は、当時の

気候を知る手がかりとなる化石です。過去の研究では、産出した葉や花粉の化石の種類から、杖立層が堆積した頃は湖の周辺に落葉広葉樹林や針葉樹林が広がり、現在より寒冷な気候であったと推測されています。（廣田志乃）

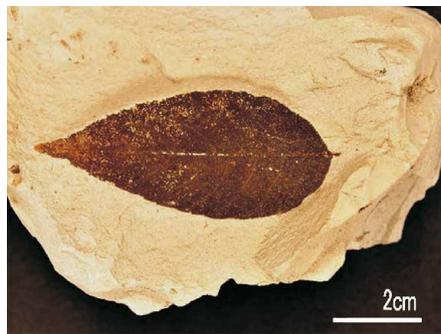


写真2-1 ブナの葉



写真2-2 ナラ類の葉

No237
民俗

ます
けんち枡

けんち枡はイワシなどの小魚を量る^{おけ}桶型の枡です。側面や底に水抜き穴があるのが特徴です。熊本県内ではイワシオケやウオマス、あるいは漁師の言葉で枡一杯をヒトカイ、ヒトカエということからトガエと呼ばれていました。

我が国では小魚は慣習的に重さではなく枡目で量って取引されてきました。明治期まで公式の枡はすべて方形でしたが、小魚の取引には円筒形の桶や籠^{かご}なども非公式に使われていました。

熊本県では、『熊本県漁業誌』（明治23年）によると、小魚は凡そ1斗2～3升の桶で量るとあります。一緒に入る海水をのぞけばだいたい1斗になるからだそうです。ほかにもキシヤメゴなどと呼ばれる、だいたい1斗入る深い竹籠などが使われていたようです。

けんち枡は、山口県や長崎県の島々などで慣習的に使われていたものですが、大正7年から正規の枡となり、検定が行われ規格が安定したことから、熊本県でも、特に煮干しに加工する小型イワシの漁が盛んな八代海沿岸地域で使われはじめたと推測されます。

熊本県内のイワシ漁は大正時代から昭和30年代が特に盛んでした。この時期、上天草市大矢野町では、地曳網^{じびきあみ}1回の水揚げでけんち枡300杯以上、多いときは1000杯以上獲れたそうです。（迫田久美子）



使用地：栖本町古江
使用年代：昭和初期
サイズ：口径33.5cm、高32cm

No238
動物

チクシブチサンショウウオ *Hynobius oyamai* (サンショウウオ科)

チクシブチサンショウウオ (写真1、写真2) は、青紫色の体に青白い地衣状斑紋をもつ美しいサンショウウオで、2019年にブチサンショウウオ (写真3) から分けられ、新種として記載されました。



写真1 チクシブチサンショウウオ標本 (南小国町産)



写真2 チクシブチサンショウウオ (南小国町)

一昔前まで、本種を含む“ブチサンショウウオ”は、「西日本に広く分布する代表的な流水性サンショウウオ」とされていたのですが、2008年に“コガタブチサンショウウオ”が分けられ、さらに2019年には“ブチサンショウウオ”と“コガタブチサンショウウオ”がそれぞれ3種と4種に分けられて計7種となり、各種の分布が狭い範囲に限定されることになりました。本種は福岡県、大分県、熊本県の3県だけに分布していて、熊本県では北部の山地溪流周辺で見られ、ここが分布の南限となっています。



写真3 ブチサンショウウオ (長崎県)

近年、日本産サンショウウオ科では遺伝学的な分類手法が広く用いられるようになり、これまでの形態学的手法による分類が大きく修正されています。本種も主に遺伝的な違いを根拠として、姿や生態が酷似し、分布も長崎県から福岡県西部までと隣接している真のブチサンショウウオから分けられました。驚いたことに、本種は真のブチサンショウウオよりも、北アルプス周辺に分布するハクバサンショウウオ (写真4) や、南アルプス周辺に分布するアカイシサンショウウオ (写真5) に近縁という解析結果が出ています。本種がこれまでどのような道を辿り現在に至ったのか、日本列島の成り立ちとも関わりがありそうで、興味が尽きません。

写真1の個体は南小国町で採集されたものです。この美しく希少なサンショウウオが、これからも「日本の地史の生き証人」として熊本の山に生き続けることを願ってやみません。(中園洋行)



写真4 ハクバサンショウウオ (岐阜県)



写真5 アカイシサンショウウオ (静岡県)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869 - 0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL : 0964 - 34 - 3301 FAX : 0964 - 34 - 3302
E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP : <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>
[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km

